

## 相談事例データを生かした相談員・肝炎医療コーディネーターの養成 およびスキルアップ

研究分担者 八橋 弘 国立病院機構長崎医療センター 臨床研究センター長

### 研究要旨

相談事例データを生かした相談員・肝炎医療コーディネーターの養成およびスキルアップの参考資料として、肝炎患者のあり方、肝炎患者への偏見差別を考える公開シンポジウム参加者の中から医療従事者という属性を選択した者の自由記述の抽出をおこない、医療従事者が、ウイルス肝炎患者のあり方、偏見差別の問題を、どのように位置づけて受け止めているのか検討した。

肝炎ウイルス感染者への偏見や差別事例の件数は、自分が今まで相談を受け入れてきた経験から想像するよりも多いということ、また偏見や差別の内容が複雑で一部には深刻な問題が含まれること、偏見や差別を無くすための対策や普及啓発活動が必要という記述を見出すことができた。

### A . 背景、目的、方法

肝炎ウイルス感染者の偏見や差別による被害防止への効果的な手法の確立に関する研究班（研究代表者：八橋 弘）では、（肝炎患者のおかれた状況について考える公開シンポジウム）を 2018 年 6 月に福岡で、8 月に札幌で、10 月に大阪で、12 月に東京で開催した。毎回 80 名前後の参加者があり、ウイルス肝炎患者のあり方、偏見差別の問題について参加者と共に議論をおこなってきた。歯科診療における外来環( 歯科外来診療環境体制加算 )制度、病院受診時の告知の問題、感染性医療廃棄物の扱い、職場での肝炎検診における問題などをテーマとして参加者と共に討論をおこなっている。公開シンポジウム参加者からは、肝炎患者の偏見差別を減らすための具体的な方法を見出すことへの期待、このような公開シンポジウムの開催を引き続きおこなうことなどの期待が寄せられている。

本公開シンポジウムでは、医師、看護師、肝炎コーディネーター等の医療従事者も参加している。また、公開シンポジウム終了時には、無記名でシンポジウムに参加しての感想と意見について自由に記述いただき、今後の研究のあり方に役立てることにしても書面同意を得た上で回収をおこなっている。また、アンケート記入者の属性に（患者、患者家族、一般市民、医療従事者）の項目を設けている

相談事例データを生かした相談員・肝炎医療コーディネーターの養成およびスキルアップの参考資料として、公開シンポジウム参加者の中から医療従事者という属性を選択した者の自由記述の抽出をおこなった。医療従事者が、ウイルス肝炎患者のあり方、偏見差別の問題を、どのように位置づけて受け止めているのか検討した。

## B . 結果、成績、考察

公開シンポジウム参加者数/アンケート回収部数は、以下のとおりであった。6月の福岡(67名/40部)、8月の札幌(78名/59部)、10月の大阪(79名/54部)、12月の東京(104名/72部)。札幌、大阪、東京でのアンケートには、アンケート記入者の属性として(患者、患者家族、一般市民、医療従事者)の項目を追記した。医療従事者という属性を選択した者の自由記述を以下のように抽出した。なお個人が特定される可能性

のある記述に関しては、記述内容の修正をおこなった(表1)。

それらの自由記述をまとめると、肝炎ウイルス感染者への偏見や差別事例の件数は、自分が今まで相談を受け入れてきた経験から想像するよりも多いということ、また偏見や差別の内容が複雑で一部には深刻な問題が含まれること、偏見や差別を無くするための対策や普及啓発活動が必要という記述を見出すことができた。

表1. アンケート自由記述

1. 医療者が正しい知識を持っている人が少ない事に驚いた。肝炎コーディネーターとして医療者、特に専門外の所属に対しての啓発とその時に自分達の行為や言動が、差別、偏見につながる可能性があることを周知しなければならないと思う。実際に のコーディネーターに向けて啓発を行いました。ほとんどの医療職で、こういった差別、偏見について知らないという状況であった。伝えることで今後の行動が変化すると考える。このようなシンポジウムや情報共有の場は必要と考える。今後も正しい知識の啓発、普及を行っていきたい。又、新しい情報を発信していかなければならないと感じた。
ウイルス性肝炎患者の置かれた状況を再認識するのにすごく良い機会であった。多くの一般医療従事者すべてに(差別偏見について)こういった機会を持てると良い。多くの国民にしっかりと啓発していく必要がある。B型肝炎もHIVのようなU=Uみたいな啓発があると良いと思った。
医療機関で患者さんやご家族から相談を受けることがあるが、ここ2~3年は差別や偏見に関する内容はあまりなく、もうそのような偏見の問題は過去のことになったと思っていた。本日の切実な思い、事例は大変勉強になった。今後も定期的に情報発信されることを希望する。院内のスタッフへも広めたい。
知人に誘われて今回のこの公開シンポジウムに参加したが、まだまだ偏見や差別はあって、苦しんだり悩んだりしている人達が多くいることを知った。結婚や出産等、保育園生活等の差別偏見の問題を具体的に勉強ができて良かった。
相談事例というのは一部であり、まだ社会の中でもっと偏見や差別で悩まれている事があるという事、法律上では認められないと言われる事でも、現社会では普通におこなわれていることを知り、やはり社会への啓発、具体的な対策を周知すること、問題を抽出することも大事だと思った。肝コーディネーターの人にも、このような実際の悩み、事例があってそれを知った上での介入というものを考えてもらうよう伝えるべきだと思った。差別、偏見はなくなるとコメントがあったが、それだからやらないではなく、できるだけ減らすとり組みをすすめていくべきだと思う。
普段そこまで考えないことを深く掘り下げられてとても有用な時間であった。一筋縄ではいかない問題(社会問題)・心配いらない疾患であるという啓発が必要だが、その仕方も難しい。(なぜ伝えたいことがなぜ国民に伝わらない?) 広くひろめる方法はどうか? (どの疾患でも、どの感染症でもそうだが...)・C 治す、B コントロールする=感染することはない=よいこと}ことがよくわかった。むしろ、調べていない人が最も無責任でよくないことを伝えたい。職場の健診で肝炎検査を調べることにプライバシーの問題がある様な印象をうけた。一度考え直したい。外来環を設定することがおかし、すべての医療機関で感染対策ができるようなことを行うべきと思う。理容院、理髪店では手荒れの問題とかある。人と人が接する職業に関してはしっかりと感染対策にとりくむ必要があるのでは。
病院でB型C型の患者の対応を見ているが、差別をしていると感じたことがない。個人情報取り扱いの問題であると思う。標準感染予防策をどの患者にも病院では行っていることがほとんどであった。感染症あるなしにかかわらず予防策はしていた。偏見が医療者にもあることに驚いた。

ウイルス肝炎は感染者の高齢化と感染症としての“解決”が既成事実となり、“忘れ去られる”可能性のある分野...などではない。患者の悩みは今でもつきない。参加してよかったと感じている。
大変勉強になった。 に勤務しているが、明日からの業務の参考にしたいと思う
今後の仕事にもとても勉強になった。少しでも差別偏見がなくなることを希望する
医療機関での偏見や差別が多いという事実には驚いた。日常生活内での事例が肝炎の知識が不足していることから発生しているの正しい知識を広めていかなければならないと再認識した。
このような企画が多くの方に届くように色々な形で情報を伝えてほしい。
シンポジウムで提示した事例に対してきちんと対応できるか自信がないことに気が付いた。肝臓専門医としてウイルス肝炎患者様の気持ちを分かったつもりでいた。日本最大の感染症で感染症であるウイルス性肝炎の啓発により一層協力していきたい。
パネリストの実際の声を聞くことができて良かった。相談相手の気持ちに寄り添い共有する事は大事なことでであると認識した。
B型・C型肝炎患者さんがまだ差別的な扱いを受けているという現状がよく理解できた。偏見がなくなるよう患者へのサポートをしていきたい。歯科の先生向けのシンポジウムの企画はどうか。
肝炎のみならず感染に対する知識が少ないが為の偏見差別が問題となっている。まずは医療従事者へのレクチャーが必要と思った。
相談を受ける立場として貴重な助言・参考となる知見をえた。参加された患者の方々からの心強い話がたくさんあったと思う。また、会場からの発言で更に検討が進んだこと（医師が肝炎を職場に申告する必要がないと伝えれば患者の後ろめたさが減るのでは？）も大変良かった。今後も双方向的な議論を進めていただきたい
実際の問題を聞いて、医療者側ももっと知識を増やしたり普及させることが大事であり、実際に相談を受けた時にどう答えるべきかを知る事ができ、とても参加して良かった。まだ沢山辛い経験をされた方がいると思う。少しでもそういった方が増えないように体制を整えていくべきだと実感した。
総合病院に勤めていると大体の医療従事者は基本的な知識や感覚を持っているが、歯科や看護学校等の知識の薄さにびっくりした。歯科だけでなく、もしかしたら眼科や耳鼻咽喉科のクリニックもそうではないかと思った。肝炎ウイルスを含めた感染症等の情報・知識を単科のクリニック等にも、しっかりと広める活動が必要と思う。血液感染と経口感染の区別がしっかりとついていないことが、偏見差別がおきる一つの原因なのではないかと思う。

### C . 結論

相談事例データを生かした相談員・肝炎医療コーディネーターの養成およびスキルアップの参考資料として、肝炎患者のあり方、肝炎患者への偏見差別を考える公開シンポジウム参加者の中から医療従事者という属性を選択した者の自由記述の抽出をおこない、医療従事者が、ウイルス肝炎患者のあり方、偏見差別の問題を、どのように位置づけて受け止めているのか検討した。肝炎ウイルス感染者への偏見や差別事例の件数は、自分が今まで相談を受け入れてきた経験から想像するよりも多いということ、また偏見や差別の内容が複雑で一部には深刻な問題が含まれること、偏見や差別を無く

すための対策や普及啓発活動が必要という記述を見出すことができた。

### D . 研究発表

#### 1 . 論文発表

なし。

#### 2 . 学会発表

なし。

### E . 知的所有権の取得状況

なし。